

Ⅱ-2 樹木Ⅰ調査

1. 樹木の現況

(1) 区全体の現況

【全体（樹木Ⅰ・Ⅱ調査合計）	(H16)		(H26)
○樹木本数	29,942本	→	28,365本
【樹木Ⅰ調査】			
○直径20cm以上の樹木本数	24,024本	→	22,480本
○樹木本数の増減	2,279本の減少	→	1,544本の減少
○変化率	8.7%の減少	→	6.4%の減少

空中写真より作成したオルソ画像と、前回調査（2004（平成16）年度）とを比較し、25㎡以上のまとまった樹木被覆地の消失・増加箇所の抽出を行い、この部分について前回調査結果の*1胸高直径20cm以上の樹木の位置、樹種、直径を調べ、地域ごとの分布状況に反映した。なお、区立の公園・緑道については、*2倒木危険度調査（2013（平成25）年度実施）資料を基に整理した。

なお、樹木Ⅰ調査では道路植栽の樹木については調査対象から除外しており、道路植栽の調査結果については樹木Ⅱ（道路植栽）調査に記載する。

樹木Ⅰ調査における本区の直径20cm以上の樹木の本数は22,480本である。直径別にみると、直径20～30cmは12,301本、直径30～40cmは5,937本、直径40cm以上は4,242本となっている。樹種はスダジイ、サクラ、ケヤキ、イチョウ、ヒマラヤスギ、シラカシの順が多い。樹木の分布を図Ⅱ-2-1に示す。

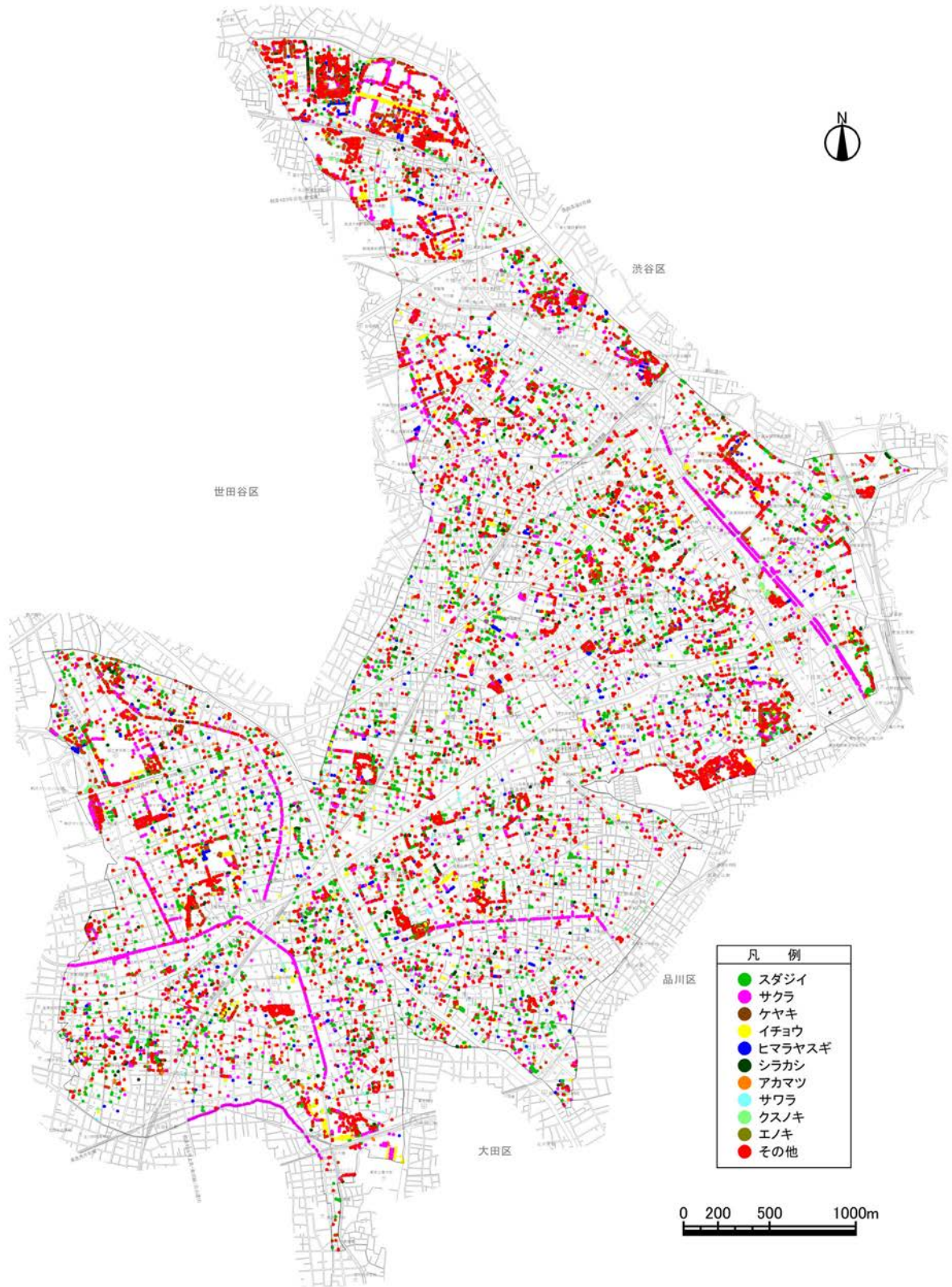
前回調査から変化した樹木本数を表Ⅱ-2-1に示す。前回から減少した樹木の本数は3,130本、新規に確認された樹木は1,586本で、差し引き1,544本の樹木が減少したことになる。変化率（前回樹木本数を100とした変化の割合）は-6.4%である。直径区分別では、直径20cm以上30cm未満で-12.1%、直径30cm以上40cm未満で-3.6%、直径40cm以上の樹木では9.5%増加している。なお、新規確認樹木については、倒木危険度調査及び緑化計画により、直径を把握した。

表Ⅱ-2-1 樹木本数の経年変化

直径区分	樹木本数 (本)	減少した樹木 (本)	新規確認 樹木(本)	変化本数 (本)	変化率 (%)
A 20cm以上30cm未満	12,301	2,390	699	-1,691	-12.1
B 30cm以上40cm未満	5,937	521	300	-221	-3.6
C 40cm以上	4,242	219	587	368	9.5
合計	22,480	3,130	1,586	-1,544	-6.4

*1 胸高直径：資料編 P.164 用語集(12)参照

*2 倒木危険度調査：資料編 P.164 用語集(13)参照



注) 道路植栽の樹木は除く

図Ⅱ-2-1 直径20cm以上の樹木分布図

(2) 地区、住区別の現況

	(H16)		(H26)
○樹木本数の多い地区	西部地区 (6,464 本)	→	西部地区 (6,087 本)
少ない地区	南部地区 (3,189 本)	→	南部地区 (2,820 本)
○樹木本数の多い住区	駒場住区 (3,510 本)	→	駒場住区 (3,410 本)
少ない住区	向原住区 (257 本)	→	向原住区 (206 本)

地区・住区別の樹木分布状況と経年変化を表Ⅱ-2-2、図Ⅱ-2-2、図Ⅱ-2-3に示す。

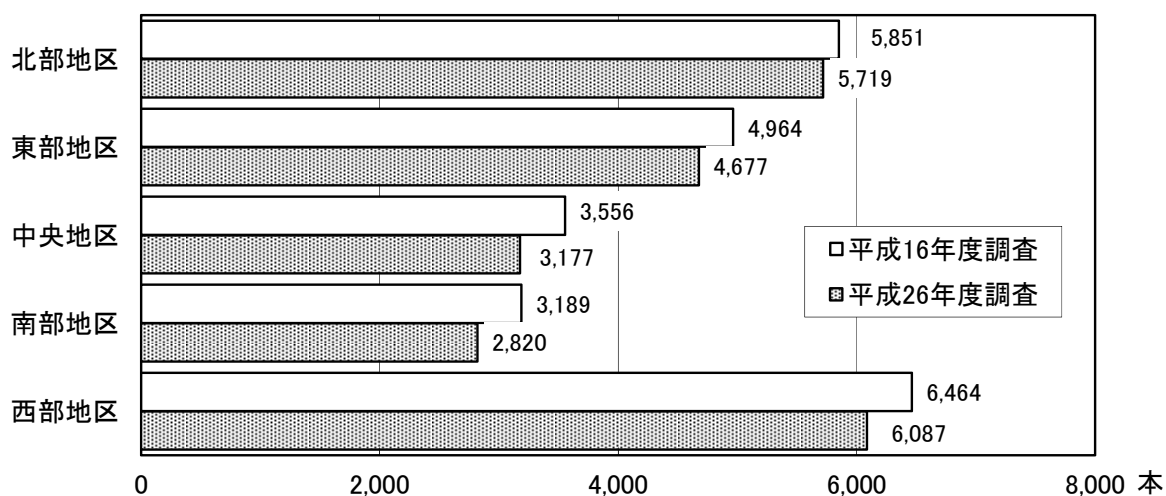
地区別に見ると、樹木本数は、面積の大きい西部地区が 6,087 本と最も多く、最も少ない南部地区 (2,820 本) の 2 倍程度となっている。

前回調査 (2004 (平成 16) 年度) との比較では、区全体の変化率は -6.4% であるが、これよりも大きく減少している (マイナスの変化率の大きい) 地区は中央・南部地区となっている。一方、区平均よりも減少の度合いが少ない地区は北部地区で、東部・西部地区は区平均の変化率とほぼ同じである。

住区別に見ると、樹木本数は駒場住区で 3,410 本、東根住区で 2,010 本と多く、その他の住区では概ね 1,000 本前後である。最も少ないのは向原住区で、206 本となっている。

前回調査との比較では、大きく減少している (マイナス変化率の大きい) 住区は、向原 (-19.8%)、大岡山西 (-18.2%)、原町 (-16.4%) などである。

一方、増加している住区は、菅刈住区 (+9.5%) のみとなっている。



図Ⅱ-2-2 地区別の樹木本数と経年変化

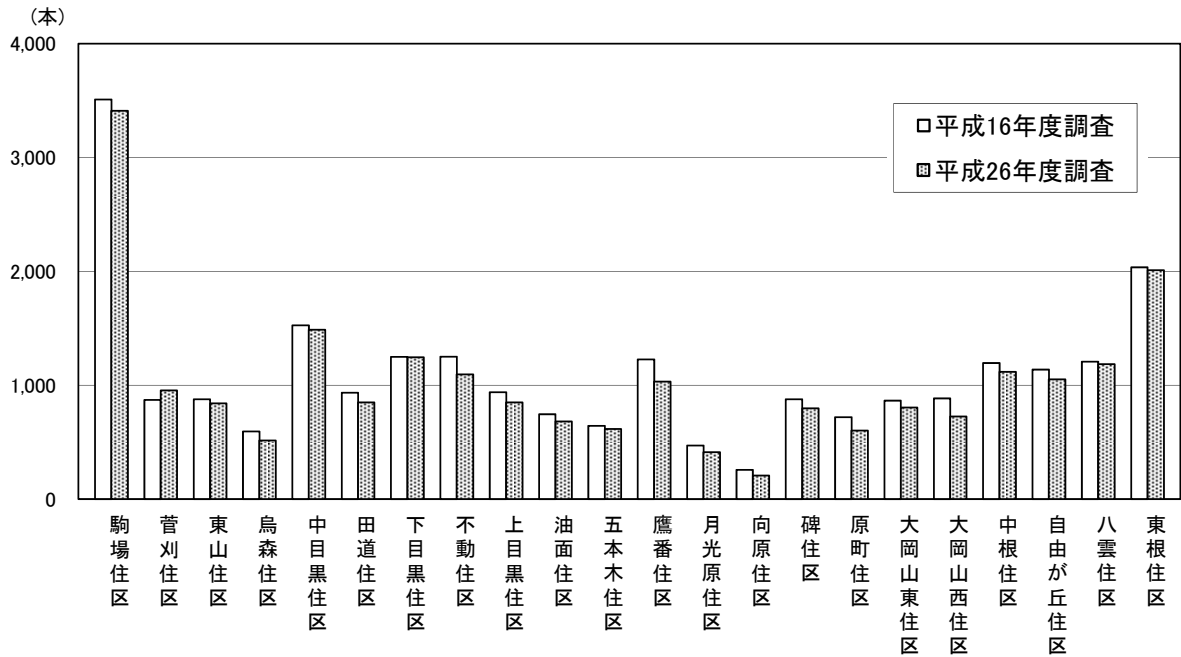


図 II - 2 - 3 住区別の樹木本数と経年変化

表 II - 2 - 2 地区・住区別の樹木本数経年変化

地区	住区	平成16年度調査 樹木本数(本)	平成26年度調査 樹木本数(本)	変化本数(本) 平成26年度 -平成16年度 (本)	変化率 変化本数 ÷平成16年度 (%)
北部地区	駒場	3,510	3,410	-100	-2.8
	菅刈	871	954	83	9.5
	東山	876	841	-35	-4.0
	烏森	594	514	-80	-13.5
	地区全体	5,851	5,719	-132	-2.3
東部地区	中目黒	1,527	1,487	-40	-2.6
	田道	935	849	-86	-9.2
	下目黒	1,250	1,245	-5	-0.4
	不動	1,252	1,096	-156	-12.5
	地区全体	4,964	4,677	-287	-5.8
中央地区	上目黒	939	849	-90	-9.6
	油面	745	682	-63	-8.5
	五本木	644	615	-29	-4.5
	鷹番	1,228	1,031	-197	-16.0
	地区全体	3,556	3,177	-379	-10.7
南部地区	月光原	471	412	-59	-12.5
	向原	257	206	-51	-19.8
	碑	877	796	-81	-9.2
	原町	719	601	-118	-16.4
	大岡山東	865	805	-60	-6.9
	地区全体	3,189	2,820	-369	-11.6
西部地区	大岡山西	885	724	-161	-18.2
	中根	1,196	1,117	-79	-6.6
	自由が丘	1,138	1,051	-87	-7.6
	八雲	1,208	1,185	-23	-1.9
	東根	2,037	2,010	-27	-1.3
	地区全体	6,464	6,087	-377	-5.8
区全体	24,024	22,480	-1,544	-6.4	

(3) 用途地域別の現況

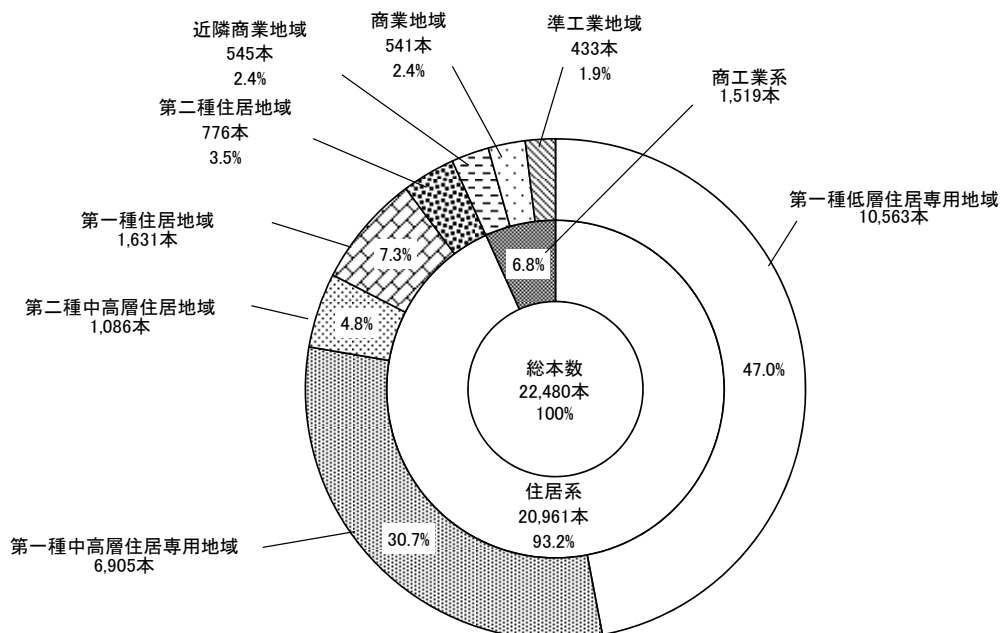
	(H16)		(H26)
○樹木の分布	93.2%が住居系用途地域	→	93.2%が住居系用途地域
○樹木の多い用途地域	第一種低層住居専用地域	→	第一種低層住居専用地域
少ない用途地域	準工業地域	→	準工業地域

用途地域別の樹木分布の現況と経年変化を表Ⅱ-2-3、図Ⅱ-2-4に示す。

第一種低層住居専用地域（10,563本）と第一種中高層住居専用地域（6,905本）で樹木本数が多く、準工業地域で433本と最も少ない。また、住居系の5用途で区内の樹木の93.2%を占めている。前回調査と比較すると、増加は第二種中高層住居専用地域（11本）のみで、それ以外の用途地域では増減なしか減少している。第一種低層住居専用地域（-715本）の減少がもっとも大きい。

表Ⅱ-2-3 用途地域別の樹木本数経年変化

用途地域		平成16年度調査 (本)	平成26年度調査 (本)	増減 (本)
住居系	第一種低層住居専用地域	11,278	10,563	-715
	第一種中高層住居専用地域	7,318	6,905	-413
	第二種中高層住居専用地域	1,075	1,086	11
	第一種住居地域	1,945	1,631	-314
	第二種住居地域	776	776	0
住居系全体		22,392	20,961	-1,431
商工業系	近隣商業地域	615	545	-70
	商業地域	574	541	-33
	準工業地域	443	433	-10
商工業系全体		1,632	1,519	-113
区全体		24,024	22,480	-1,544



図Ⅱ-2-4 用途地域別の樹木本数の現況

(4) 土地利用区分別の現況

	(H16)	(H26)
○樹木の分布	55.3%が民有地・その他	→ 48.4%が民有地・その他
○樹木の多い土地利用区分	民有地・その他	→ 民有地・その他
○樹木の少ない土地利用区分	公営住宅等	→ 公営住宅等

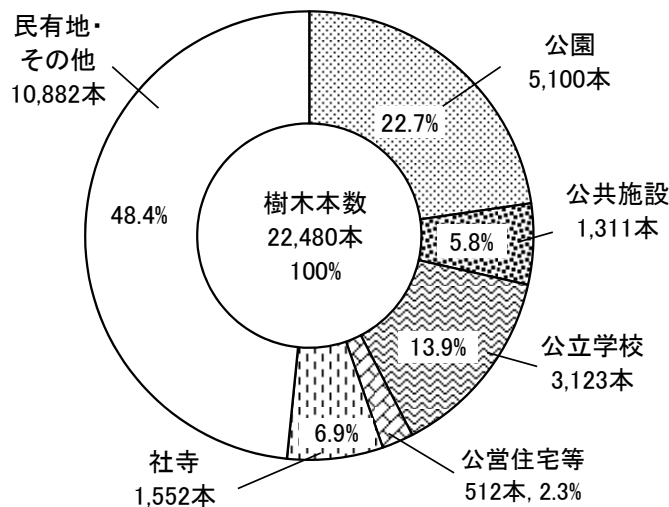
土地利用区分別の樹木分布の現況と経年変化を表II-2-4、図II-2-5に示す。

土地利用区分別の樹木は、民有地・その他（10,882本）にもっとも多く、公営住宅等（512本）でもっとも少なくなっている。

前回調査と比較すると、増加は公園（1,297本）のみで、それ以外の土地利用区分では減少している。民有地・その他（-2,402本）でもっとも減少が大きくなっている。

表II-2-4 土地利用区分別の樹木本数経年変化

土地利用区分		平成16年度調査 (本)	平成26年度調査 (本)	増減 (本)
公共施設	公園	3,803	5,100	1,297
	公共施設(庁舎等)	1,327	1,311	-16
	公立学校	3,303	3,123	-180
	公営住宅等	698	512	-186
公共施設全体		9,131	10,046	915
民有地・その他	社寺	1,609	1,552	-57
	民有地・その他	13,284	10,882	-2,402
	民有地・その他全体	14,893	12,434	-2,459
区全体		24,024	22,480	-1,544



図II-2-5 土地利用区分別の樹木本数の現況

(5) 樹木本数の多い敷地

樹木本数の多い敷地の上位 30 位を表Ⅱ-2-5に示す。樹木本数のもっとも多い敷地は東京大学駒場Ⅰキャンパス（1,071 本）で、次いで駒場公園（705 本）となる。ともに北部地区の駒場住区にある。駒場住区では、これら以外にも上位 30 位に入る敷地がいくつかあり、樹木本数の多い施設が集中した住区といえる。

中央地区と南部地区では樹木本数の多い施設は少なくなる。

表Ⅱ-2-5 樹木本数の多い敷地上位 30 位

	名称	所在地	本数	種数	住区	地区
1	東京大学駒場Ⅰキャンパス	駒場3-8	1,071	61	駒場	北部
2	駒場公園	駒場4-3	705	73	駒場	北部
3	都立林試の森公園	下目黒5-37	483	87	不動	東部
4	東京工業大学大岡山キャンパス	大岡山2、緑が丘1	382	30	中根	西部
5	防衛省防衛研究所	中目黒2-2	363	34	中目黒	東部
6	東京大学駒場Ⅱキャンパス	駒場4-6-1	334	44	駒場	北部
7	碑文谷公園	碑文谷6-9	312	36	鷹番	中央
8	龍泉寺(目黒不動尊)	下目黒3-20	307	35	下目黒	東部
9	都立駒沢オリンピック公園	東が丘2-16	288	20	東根	西部
10	駒場野公園	駒場2-19	264	47	駒場	北部
11	国立病院機構東京医療センター	東が丘2-5	240	29	東根	西部
12	呑川本流緑道	緑が丘1、大岡山1、中根1、平町1、2、八雲1、2、3	235	3	中根、自由が丘、大岡山西、八雲	西部
13	防衛省東山宿舎	東山2	203	25	東山	北部
14	祐天寺	中目黒5	199	28	中目黒、上目黒	東部、中央
15	円融寺	碑文谷1-22	196	29	碑	南部
16	呑川柿の木坂支流緑道	東が丘1、柿の木坂1、2、3	195	16	八雲、東根	西部
17	碑文谷八幡宮	碑文谷3-7	189	20	大岡山東	南部
18	目黒雅叙園	下目黒1-8	177	15	下目黒	東部
19	菅刈公園	青葉台2-11	170	37	菅刈	北部
20	中根公園	中根2-6	168	22	中根	西部
21	すずめのお宿緑地公園	碑文谷3-11	141	26	大岡山東	南部
22	西郷山公園	青葉台2-10	136	30	菅刈	北部
23	東山公園	東山2、3	123	27	東山	北部
24	九品仏川緑道	自由が丘1、緑が丘1	124	2	自由が丘	西部
25	東京都立大学附属高等学校	八雲1-1	122	22	八雲	西部
26	八雲氷川神社	八雲2-4	120	16	八雲	西部
27	中央官庁渋谷会議所(旧朝倉家住宅)	上目黒1、青葉台1	117	31	菅刈	北部
28	衾町公園	八雲5-7	112	30	東根	西部
29	目黒区民センター公園	目黒2-4	88	19	下目黒	東部
30	東京都立駒場高等学校	大橋2-18	85	20	駒場	北部

2. 樹種の特徴

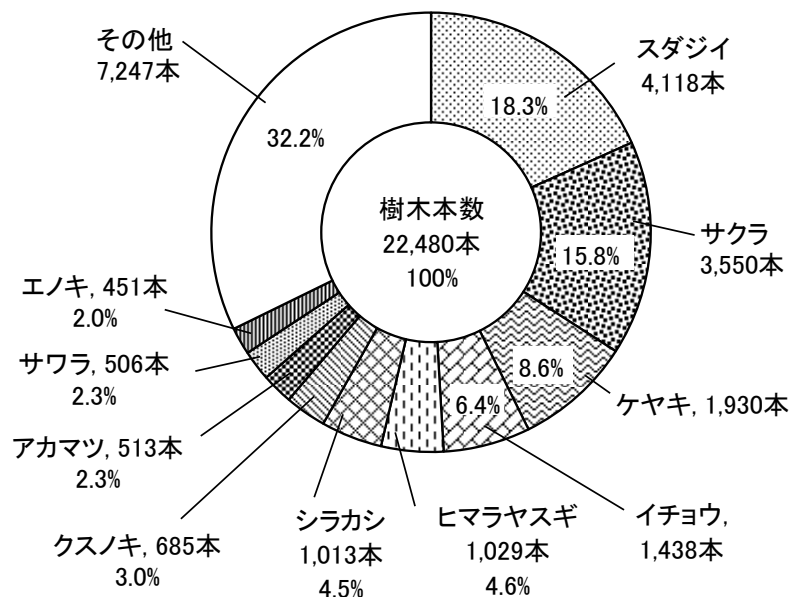
(1) 区全体の状況

	(H16)		(H26)
○樹種数	223 種	→	238 種
○上位 10 種の割合	68.0%	→	67.8%

樹種別の本数と構成比を表Ⅱ-2-6、図Ⅱ-2-6に示す。今回確認された樹種は 238 種である。樹種別の本数ではスダジイがもっとも多く、全体の 18.3%を占め、次いでサクラ、ケヤキ、イチョウが多い。また、上位 10 種で 67.8%を占めている。

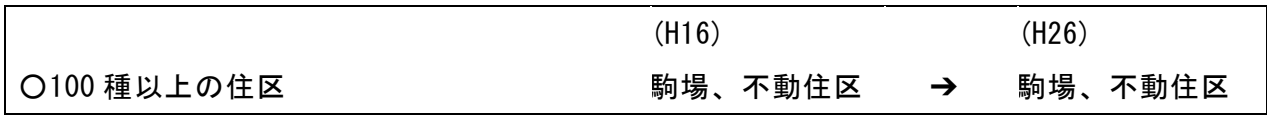
表Ⅱ-2-6 樹種別の本数

順位	樹種	本数(本)	構成比(%)
1	スダジイ	4,118	18.3
2	サクラ	3,550	15.8
3	ケヤキ	1,930	8.6
4	イチョウ	1,438	6.4
5	ヒマラヤスギ	1,029	4.6
6	シラカシ	1,013	4.5
7	クスノキ	685	3.0
8	アカマツ	513	2.3
9	サワラ	506	2.3
10	エノキ	451	2.0
11	その他	7,247	32.2
合計		22,480	100.0



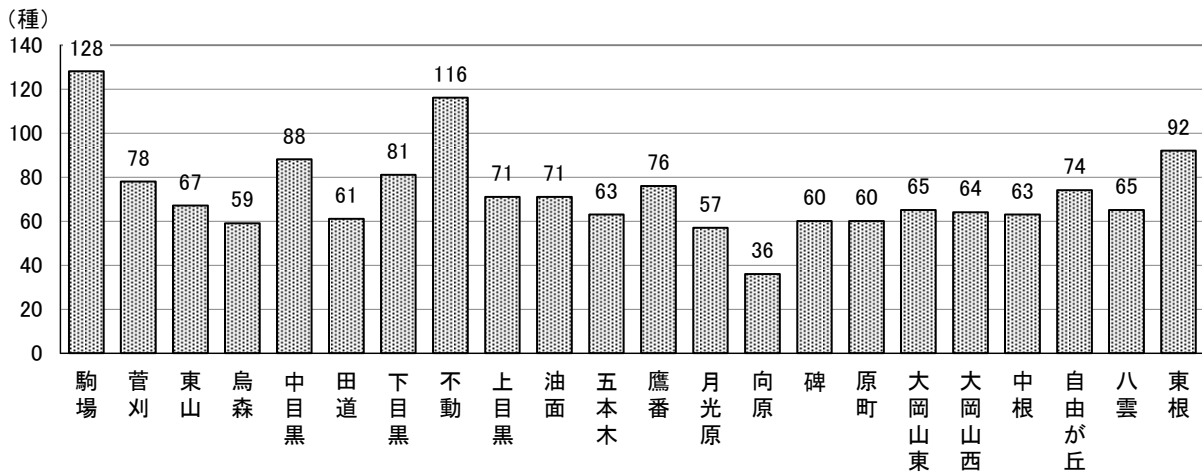
図Ⅱ-2-6 樹種別本数構成比

(2) 住区別の状況

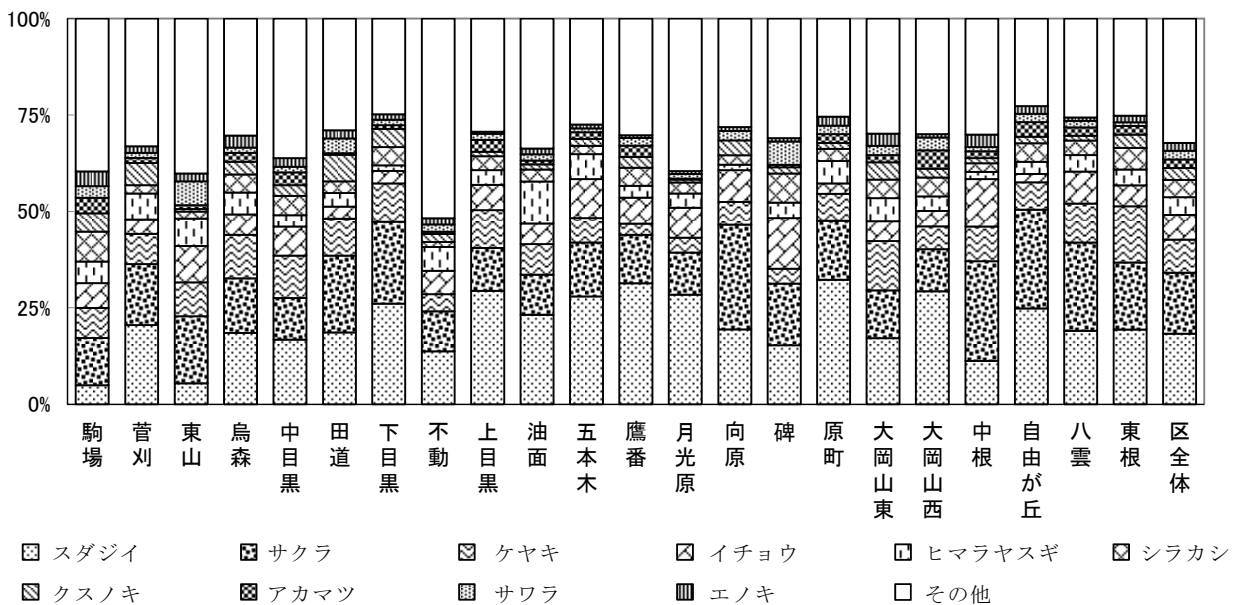


住区別の樹種数（一般名も含めた単純集計）を図Ⅱ-2-7に、住区別の樹種別構成比を図Ⅱ-2-8に示す。住区別の樹種構成数は駒場住区で128種と最も多い。不動住区が116種とこれに続く。他の住区では概ね70種前後の樹種が確認されている。

各住区とも樹種ごとの構成比に多少違いがあるものの、大半の住区において上位10種で区内の全本数の概ね70%程度を占めており、区全体の構成と同様の傾向を示す。駒場、東山、月光原の各住区では上位10種の占める割合がやや低くなっており、不動住区では最も低く、他の住区と異なっている。



図Ⅱ-2-7 住区別の樹種数

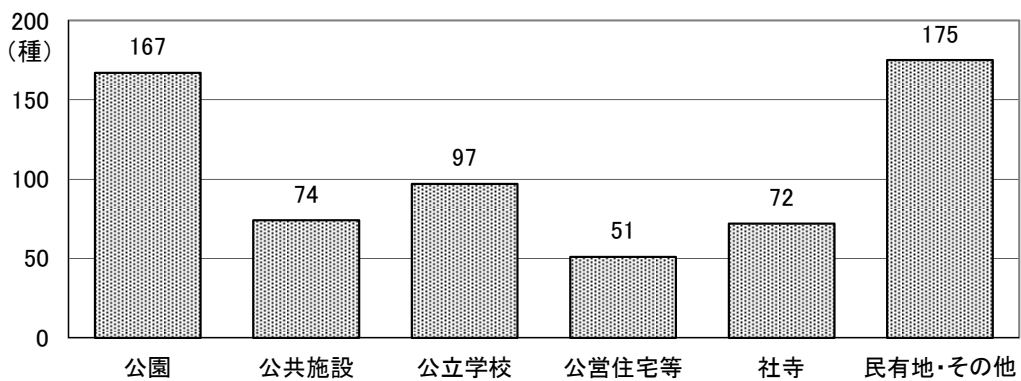


図Ⅱ-2-8 住区別の樹種別構成比

(3) 土地利用区分別の状況

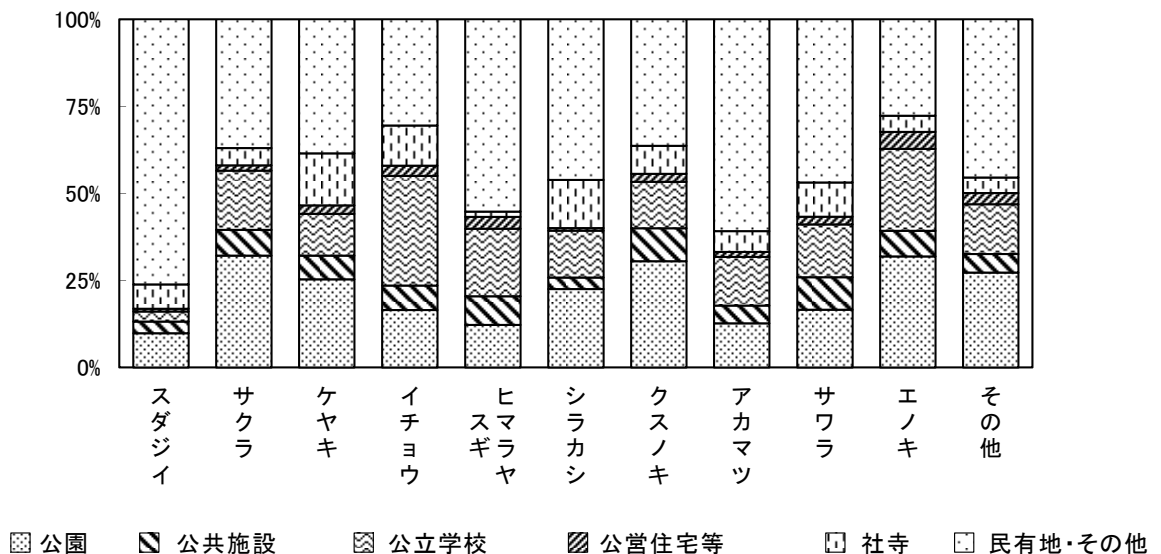
	(H16)	(H26)
○100種以上の土地利用区分	公園、民有地・その他	公園、民有地・その他

土地利用区分別の樹種数を図Ⅱ-2-9に、上位10種の樹種別の土地利用別構成比を図Ⅱ-2-10にそれぞれ示す。土地利用区分別に樹種の数を見ると、土地利用区分別の樹木本数の傾向と同じく、民有地・その他で樹種数が最も多く、次いで公園、公立学校となる。



図Ⅱ-2-9 土地利用区分別の樹種数

また、樹種により各土地利用に占める割合に差が見られ、それぞれに異なった植栽が行われている様子が見られる。スタジイはその約8割が、ヒマラヤスギ、アカマツはその6割が、民有地・その他に存在している。それに対して、サクラ、イチョウ、クスノキ、エノキは半数以上が公園、公共系の土地利用に存在している。特にイチョウは公立学校に多い。また、ケヤキ、シラカシは、社寺に占める割合が他の樹種に比べて高い。



図Ⅱ-2-10 樹種別の土地利用別構成比

3. 樹木の太さ

	(H16)		(H26)
○直径 30cm 未満の樹木の割合	58.3%	→	54.7%

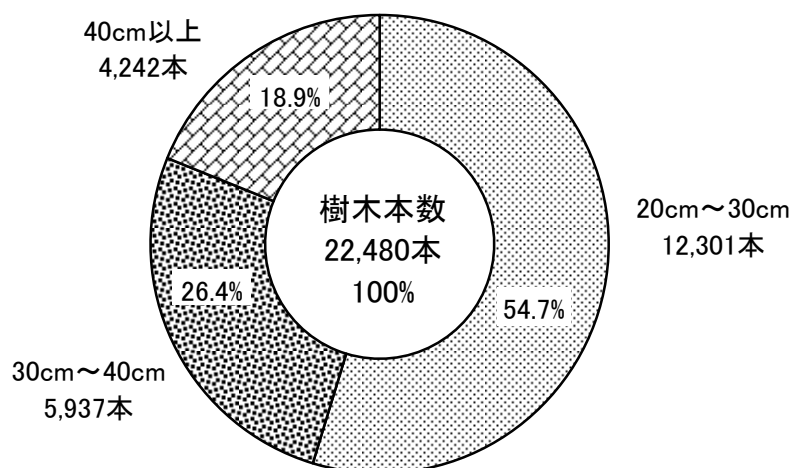
(1) 区全体の状況

直径が 20cm 以上の樹木について、直径区別の樹木本数の状況を表Ⅱ-2-7、図Ⅱ-2-10に示す。なお、前回調査時に確認され、今回の空中写真判読により現存していることが確認された樹木については、直径計測をおこなっていないため、前回調査時に記録された直径区分を用いている。なお、区立公園、緑道の倒木危険度調査（2013（平成 25）年度）の対象樹木及び緑化計画で把握した樹木については、それらの資料の数値を用いて集計している。

本区の樹木の 54.7%が直径 30cm 未満の樹木であり、40cm 以上の樹木は 18.9%である。8割以上が直径 40cm 未満の樹木で占められている。

表Ⅱ-2-7 直径区別樹木本数

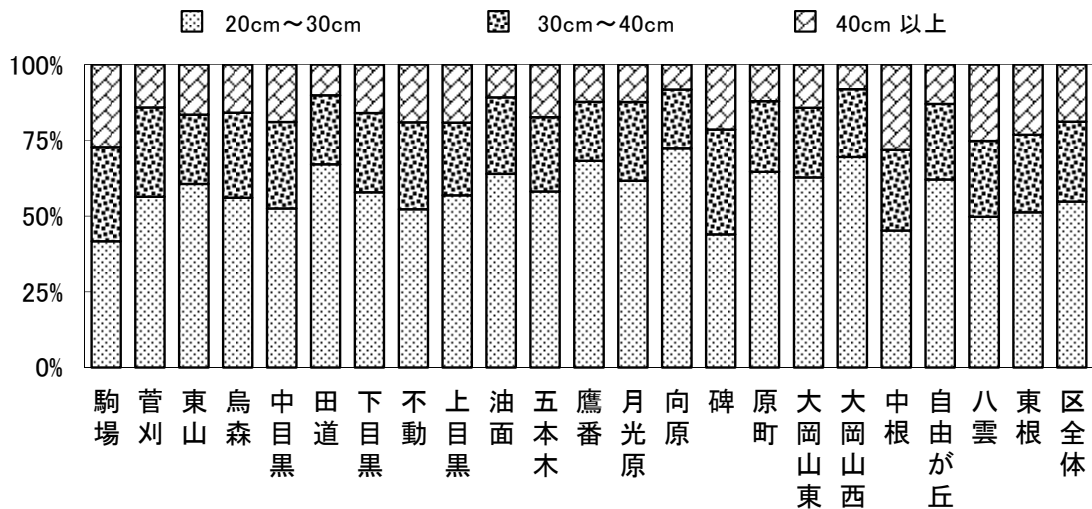
直径区分		本数(本)	構成比(%)
A	20cm以上30cm未満	12,301	54.7
B	30cm以上40cm未満	5,937	26.4
C	40cm以上	4,242	18.9
合計		22,480	100.0



図Ⅱ-2-11 直径区別の樹木本数構成比

(2) 住区別の状況

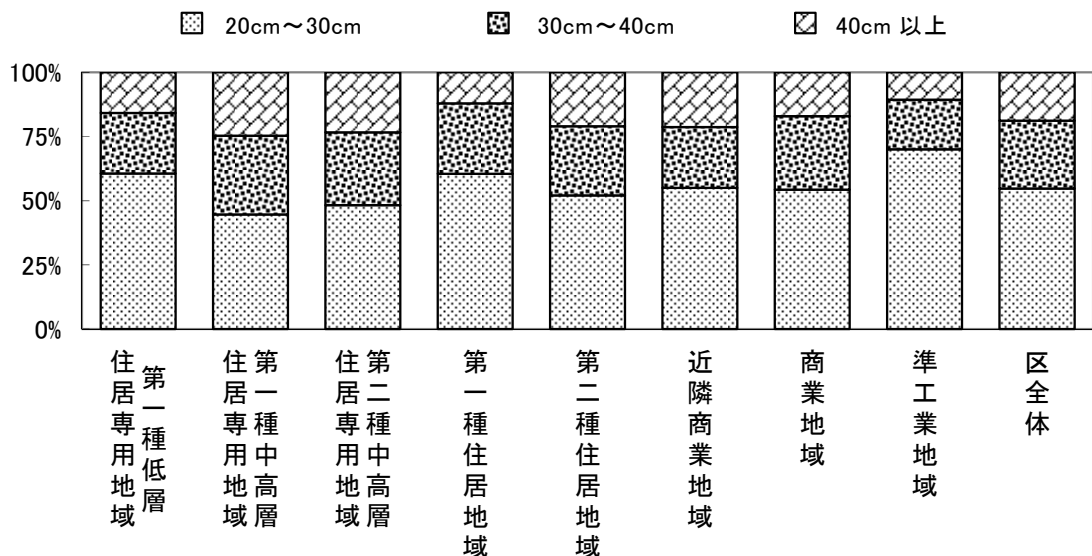
住区別の直径区分別構成比を図Ⅱ-2-12に示す。直径30cm以上の樹木の割合の大きい住区は駒場、碑、中根、八雲住区で、いずれも50%を超えている。一方、少ない住区は田道、鷹番、向原、大岡山西住区で30%前後となっている。



図Ⅱ-2-12 住区別の樹木直径区分別構成比

(3) 用途地域別の状況

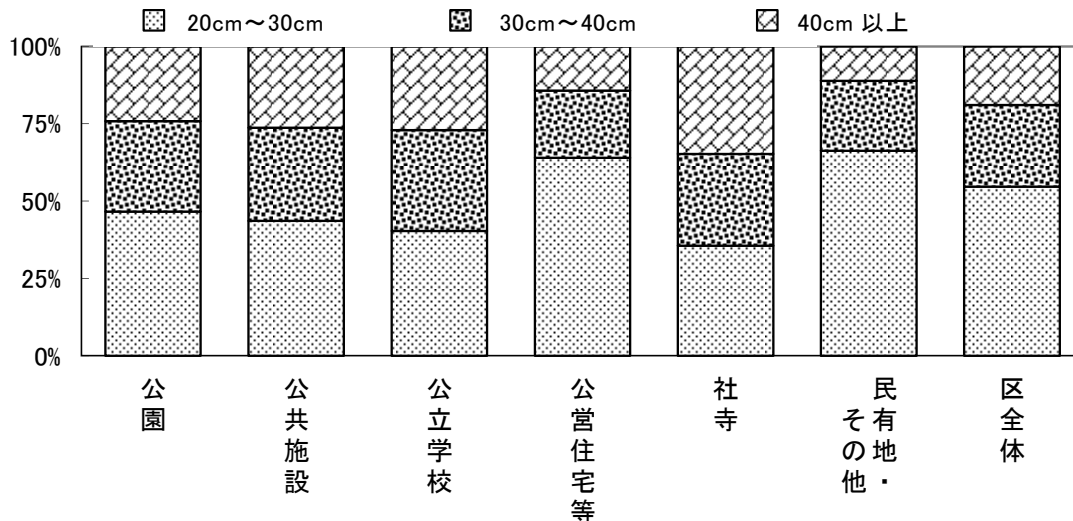
用途地域別の樹木直径区分別構成比を図Ⅱ-2-13に示す。直径30cm以上の樹木の割合の高い用途地域は、第一種・第二種中高層住居専用地域でいずれも50%を超えている。これらの地域には、太い樹木の割合が高い公園（駒場野公園、都立林試の森公園、都立駒沢オリンピック公園など）、公共施設（東京大学駒場Ⅰキャンパスなど）、社寺（龍泉寺（目黒不動尊）、円融寺など）が多く存在しているためである。



図Ⅱ-2-13 用途地域別の樹木直径区分別構成比

(4) 土地利用区分別の状況

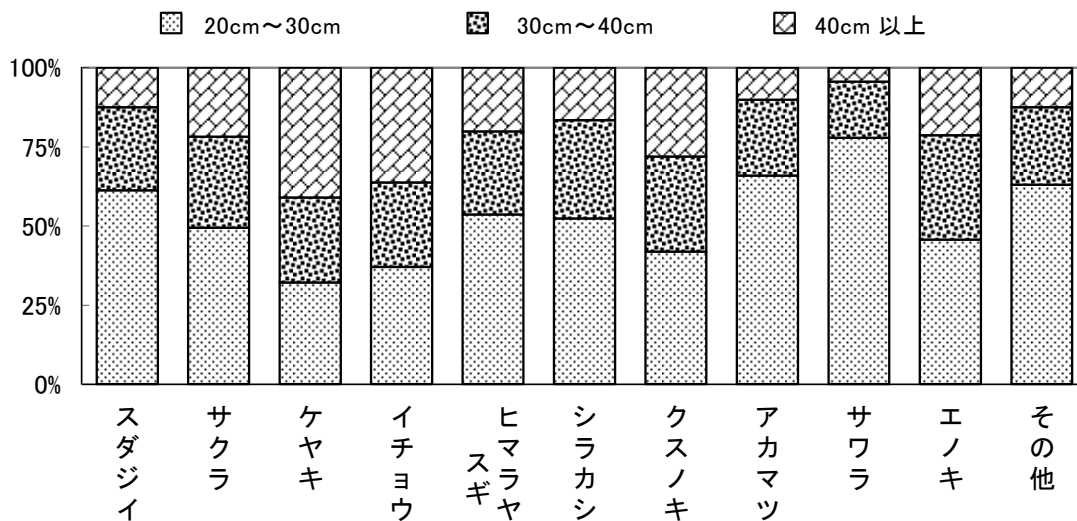
土地利用区分別の樹木直径区分別構成比を図Ⅱ-2-14に示す。公園、公共施設、公立学校、社寺ではいずれも直径30cm以上の樹木が50%以上を占めている。一方、公営住宅等と民有地・その他は35%前後である。これは、公園、公共施設、公立学校、社寺では樹木が比較的長期間にわたって保全育成されてきたことを意味する。これに対し、公営住宅等、民有地・その他では樹木が長期間にわたり保全されにくい状況を示していると考えられる。



図Ⅱ-2-14 土地利用区分別の樹木直径区分別構成比

(5) 樹種別の状況

本数の上位10種とその他の樹種別の直径区分別構成比を図Ⅱ-2-15に示す。樹種により構成比に差が見られ、ケヤキ、イチョウ、クスノキで太い樹木の割合が高く、スダジイ、アカマツ、サワラでは細い樹木の割合が高い。



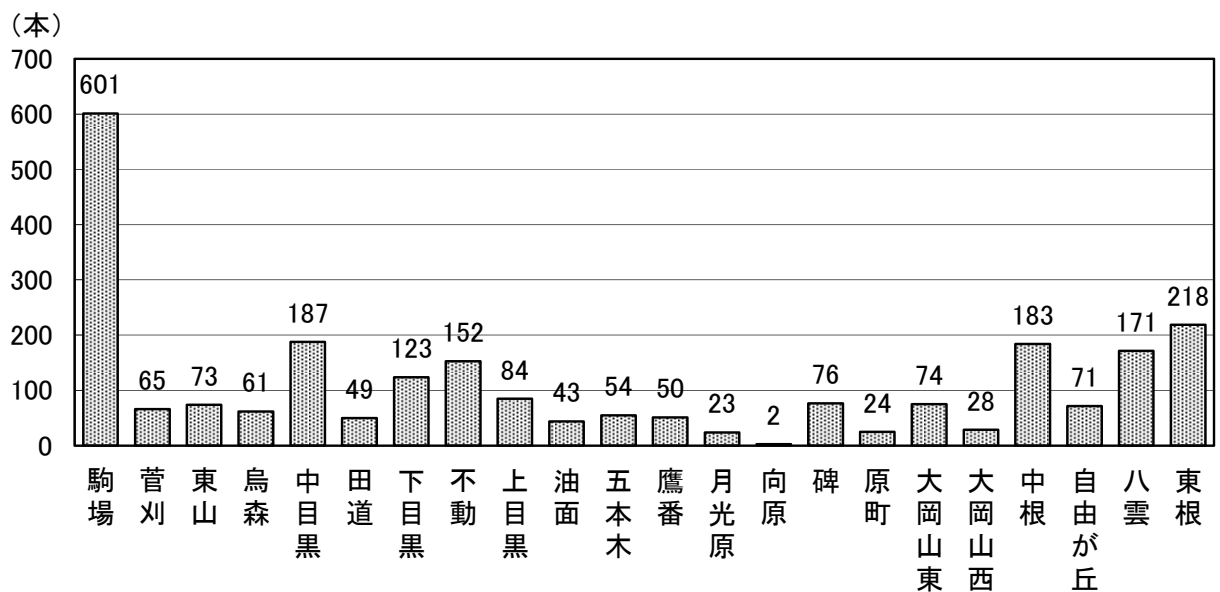
図Ⅱ-2-15 樹種別の直径区分別構成比

(6) 大径木

樹種別直径 50cm 以上の樹木本数を表Ⅱ-2-8 に、住区別の直径 50cm 以上の樹木本数を図Ⅱ-2-16 にそれぞれ示す。本区にある直径 50cm 以上の大径木は 2,412 本である。樹種別ではケヤキが最も多く、サクラ、イチョウ、スダジイが続く。また、土地利用区分別に見ると、総樹木本数が多い公園、民有地・その他、公立学校、社寺の順に多く分布している。公の場として、あるいは信仰のシンボルとして樹木が保全されてきたことがうかがえる。

表Ⅱ-2-8 樹種別直径 50cm 以上の樹木本数

樹種	公園	公共施設	公立学校	公営住宅等	社寺	民有地・その他	全本数	樹種別構成比(%)
ケヤキ	129	37	82	5	125	158	536	22.2
サクラ	151	54	120	5	17	82	429	17.8
イチョウ	46	47	104	6	65	51	319	13.2
スダジイ	36	29	16	1	42	115	239	9.9
クスノキ	38	7	32	0	12	26	115	4.8
ヒマラヤスギ	38	15	20	10	2	26	111	4.6
ムクノキ	31	5	15	0	11	13	75	3.1
シラカシ	33	1	10	0	15	10	69	2.9
エノキ	21	8	15	0	5	10	59	2.4
ブラタナス	16	4	22	1	5	8	56	2.3
アカガシ	4	1	0	0	24	4	33	1.4
ミズキ	13	1	8	1	4	3	30	1.2
ユリノキ	5	0	15	3	0	6	29	1.2
クロマツ	13	7	3	0	1	3	27	1.1
クヌギ	11	2	5	1	0	7	26	1.1
アカマツ	8	1	6	1	0	7	23	1.0
ニセアカシア	11	0	5	2	1	1	20	0.8
その他	92	8	45	2	11	58	216	9.0
合計	696	227	523	38	340	588	2,412	100
土地利用区分別の割合(%)	28.9	9.4	21.7	1.6	14.1	24.4	100.0	—



図Ⅱ-2-16 住区別の直径 50cm 以上の樹木本数

公共施設の多い駒場住区では、直径 50 cm以上の樹木分布が突出しており、公園等の公共施設や社寺が多い東根、中目黒、中根住区などがそれに続く。また、緑被率・一人当たりの緑被面積ともに最も少ない向原住区では、2本と非常に少ない。

表Ⅱ-2-9に区内の大径木上位30本を示す。

表Ⅱ-2-9 大径木上位30本

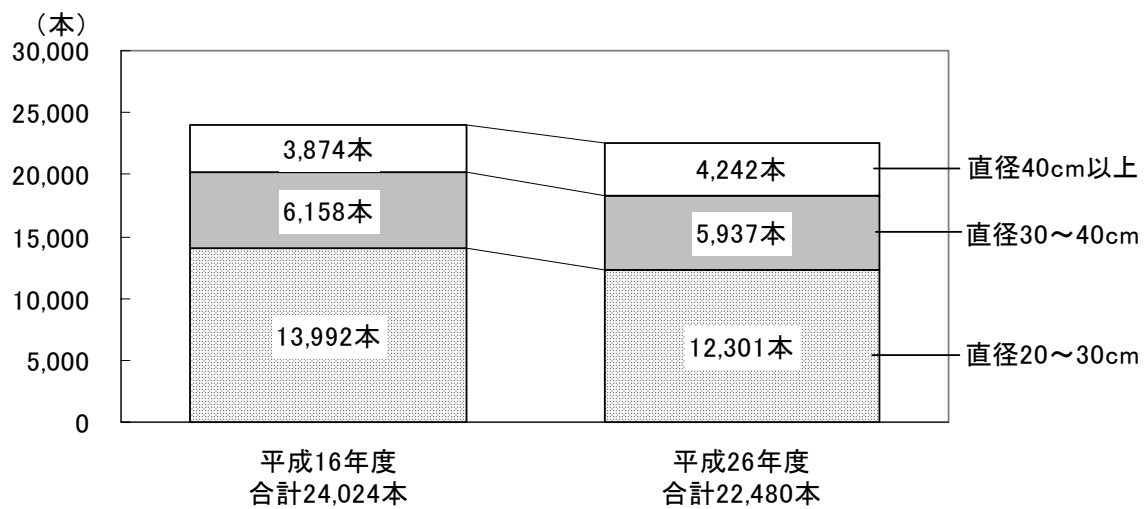
順位	樹種	直径実測 (cm)	樹高 (m)	所在地	備考
1	クスノキ	152	25	駒場4-3	駒場公園内
2	ケヤキ	151	15	平町1-16	桜森稲荷神社内
3	トウカエデ	148	10	中目黒2-3	国家公務員共済組合連合会東京共済病院内
4	クスノキ	145	17	駒場4-3	駒場公園内
5	ケヤキ	144	8	駒場4-6	東京大学駒場Ⅱキャンパス内
6	イチョウ	143	16	八雲1-2	常圓寺内
7	クスノキ	141	18	駒場4-3	駒場公園内
8	エノキ	140	11	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
9	イチョウ	139	20	青葉台2-11	菅刈公園内
10	ケヤキ	131	20	八雲1-9	東光寺内
11	イチョウ	131	20	八雲1-9	東光寺内
12	クスノキ	126	22	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
13	クスノキ	125	15	下目黒5-37	都立林試の森公園内
14	クスノキ	124	10	下目黒5-37	都立林試の森公園内
15	クヌギ	123	14	下目黒6-8	都立林試の森公園内
16	ヒマラヤスギ	121	20	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
17	クスノキ	120	17	大橋2-16	大橋氷川神社内
18	ケヤキ	120	25	東が丘1-19	民有地内
19	スダジイ	119	8	三田1-1	民有地内
20	クスノキ	117	21	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
21	スダジイ	116	13	下目黒3-21	不動公園内
22	イチョウ	115	15	下目黒3-1	大鳥神社内
23	イチョウ	113	16	中根2-21	立源寺内
24	イチョウ	111	7	碑文谷1-22	円融寺内
25	プラタナス	110	20	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
26	ユリノキ	110	21	駒場3-8	東京大学駒場Ⅰキャンパス内
27	プラタナス	110	18	八雲1-1	都立桜修館中等教育学校内
28	クスノキ	109	10	下目黒5-37	都立林試の森公園内
29	クスノキ	109	15	駒場4-3	駒場公園内
30	ケヤキ	107	20	自由が丘1-24	熊野神社内

4. 樹木の変化要因

前回調査との樹木本数の経年変化を図Ⅱ-2-17に示す。区全体の緑被率では、前回調査の17.1%から17.3%と0.2ポイント上昇したが、樹木本数（直径20cm以上）では1,544本、6.4%の減少となっている。

その一方で、増加傾向を示した菅刈住区は、菅刈公園（2001（平成13）年3月開園）の樹木の成長による影響が大きい。また、西郷山公園を含め樹林地が保全されていること、中高層建築の密集している地域で樹木が少なかったことが減少を抑えた。

また、直径50cm以上の大径木は、427本増加しており、この10年間に成長した大木が、区の緑被率の維持に貢献していることがうかがえる。



図Ⅱ-2-17 樹木本数の直径区分別経年変化

Ⅱ-3 樹木Ⅱ（道路植栽）調査

1. 道路植栽の現況

	(H16)		(H26)
○街路樹本数	5,918本	→	5,885本
○街路樹本数の多い道路	区道、都道	→	区道、都道
○街路樹本数の増減	523本の増加	→	33本の減少
○街路樹本数の増加した道路	区道、都道	→	区道
減少した道路	国道	→	都道、国道

管理者別道路植栽の現況と経年変化を表Ⅱ-3-1に、道路植栽分布図を図Ⅱ-3-1に示す。

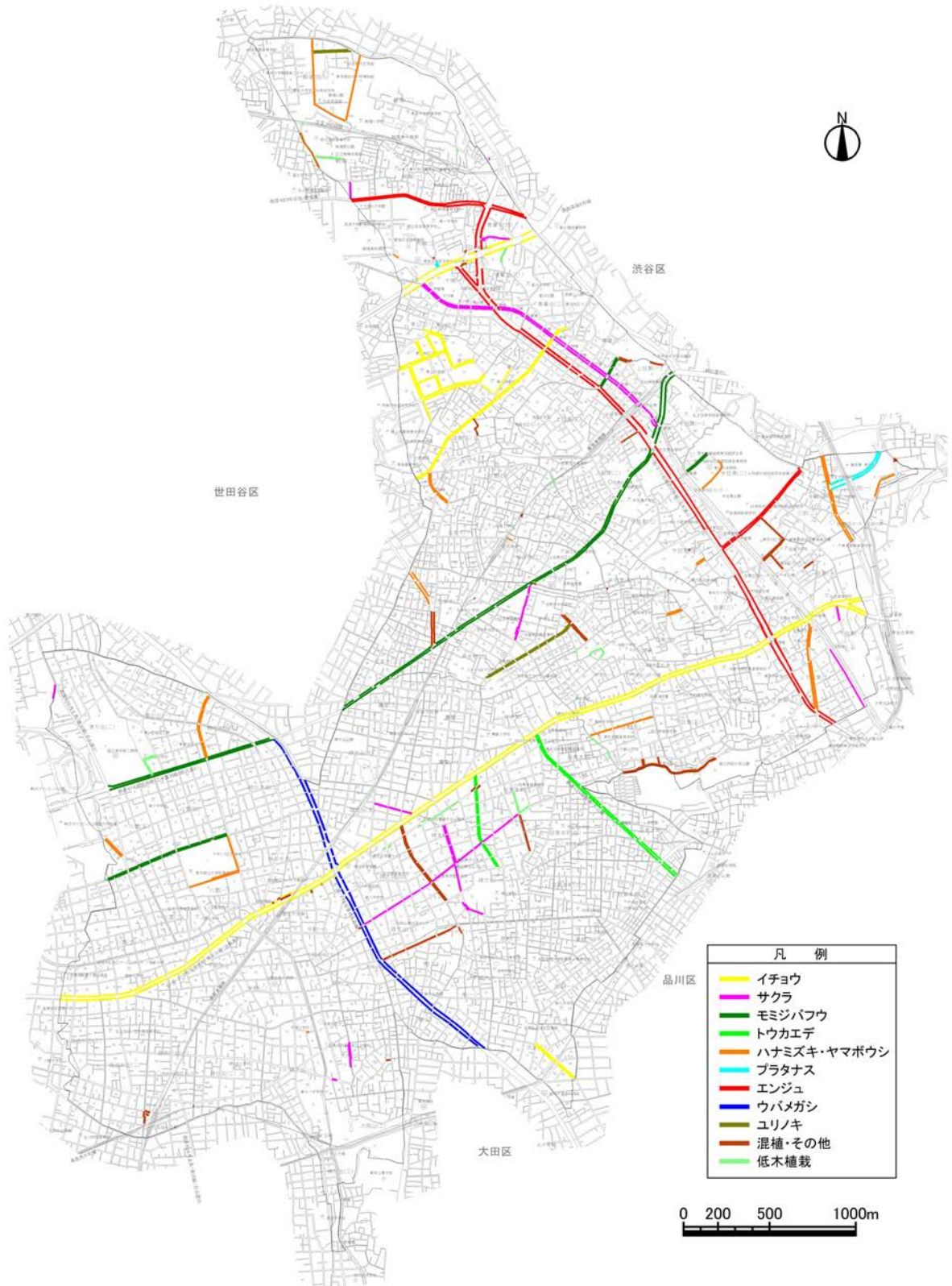
本区の街路樹本数は5,885本である。このうち区の管理する区道が2,930本（49.8%）、また都道が2,875本（48.9%）、国道が80本（1.4%）となっている。この構成比は、道路植栽延長、道路植栽面積においてもほぼ同様の傾向を示している。

前回調査（2004（平成16）年度）と比較して、区全体で33本の街路樹が減少した。管理者別では、区道で78本が増加し、都道において79本、国道において32本減少している。

道路植栽延長、道路植栽面積においても、区道では増加している。

表Ⅱ-3-1 街路樹本数の経年変化

道路植栽	平成16年度調査				平成26年度調査				増減			
	区道	都道	国道	合計	区道	都道	国道	合計	区道	都道	国道	合計
植栽本数(街路樹、本)	2,852	2,954	112	5,918	2,930	2,875	80	5,885	78	-79	-32	-33
道路植栽延長(m)	18,290	18,215	814	37,319	19,144	18,215	814	38,173	854	0	0	854
道路植栽面積(m ²)	17,998	14,734	1,128	33,860	19,186	14,734	1,128	35,048	1,188	0	0	1,188



図II-3-1 道路植栽分布図

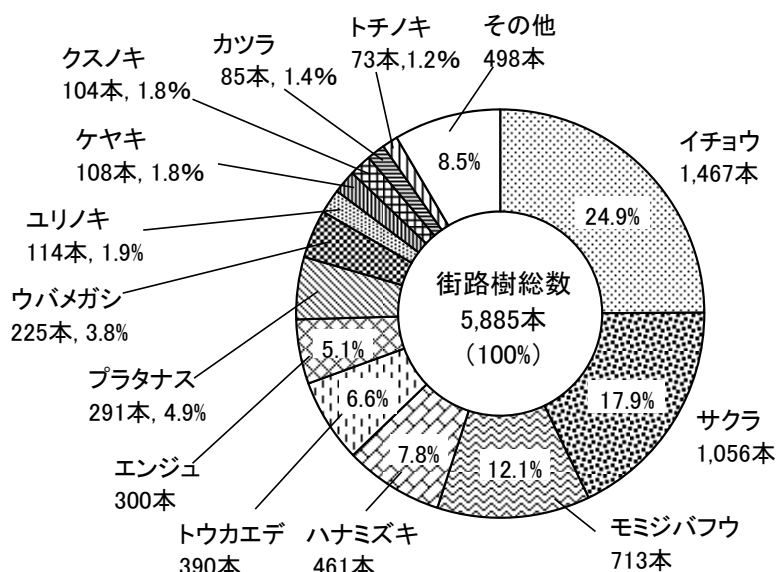
2. 街路樹種の特徴

	(H16)		(H26)
○樹種数	41種	→	71種

樹種別の本数を表Ⅱ-3-2に、本数構成比を図Ⅱ-3-2に示す。上位からイチョウ、サクラ、モミジバフウの順で、この上位3種で全体の半数以上（約55%）を占める。樹種数は合わせて71種におよび、管理者別では区道の樹種数が70種で最も多く、地域の特徴を踏まえ多様な植栽を行っている様子がうかがえる。都道は11種、国道はイチョウ、エンジュの2種のみである。

表Ⅱ-3-2 樹種別の本数

樹種名	区道	都道	国道	合計	構成比(%)
イチョウ	440	951	76	1,467	24.9
サクラ	1,053	3	0	1,056	17.9
モミジバフウ	154	559	0	713	12.1
ハナミズキ	422	39	0	461	7.8
トウカエデ	88	302	0	390	6.6
エンジュ	44	252	4	300	5.1
プラタナス	61	230	0	291	4.9
ウバメガシ	0	225	0	225	3.8
ユリノキ	114	0	0	114	1.9
ケヤキ	30	78	0	108	1.8
クスノキ	1	103	0	104	1.8
カツラ	45	40	0	85	1.4
トチノキ	73	0	0	73	1.2
その他	405	93	0	498	8.5
合計	2,930	2,875	80	5,885	100.0



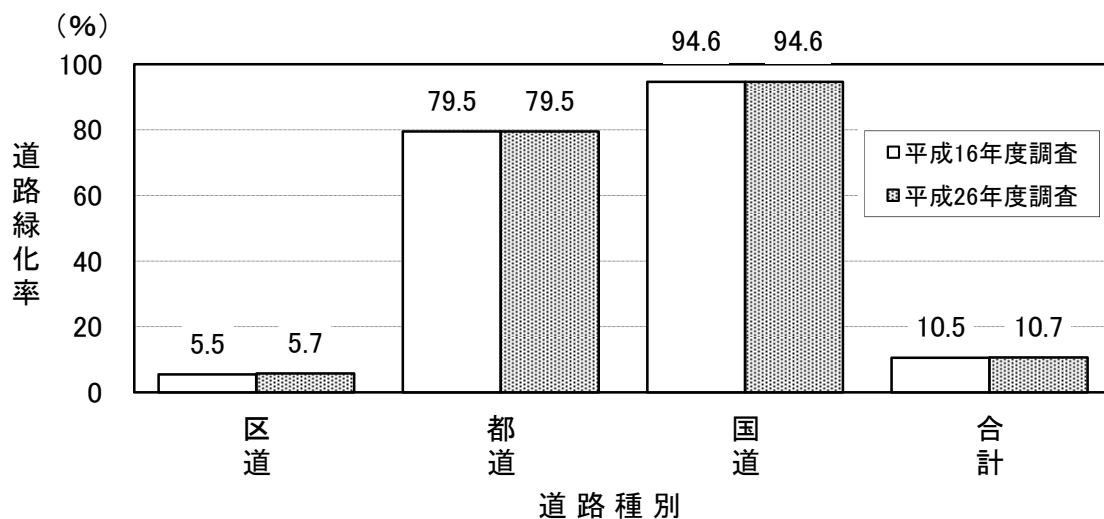
図Ⅱ-3-2 樹種別の本数構成比

3. 道路緑化率

	(H16)		(H26)
○道路緑化率	10.5%	→	10.7%
○道路緑化率の高い道路	都道、国道	→	都道、国道

管理者別道路緑化率（道路総延長を100としたときの植栽延長の割合、%）の現況と経年変化を図Ⅱ-3-3に示す。区、都、国道を合わせた区全体の道路緑化率は10.8%である。管理者別では国道、都道で高く、幅員が狭く緑化の難しい区道では道路緑化率は低くなっている。

前回調査（2004（平成16）年度）と比較して、道路緑化率は0.2ポイント増加した。これは区道の増加分が反映されたものである。



図Ⅱ-3-3 管理者別道路緑化率

4. 道路植栽の変化要因

目黒川沿いの桜並木や新茶屋坂通り沿いのエンジュなど道路植栽が整備され、街路樹が増えた。都道については、山手通りの道路整備などにより、樹木が減少していた。

このように、都道、国道の道路植栽の減少については、道路整備による影響が大きい。また、これらの道路は既に道路緑化率が高いため、今後も大幅な増加は見込めない。

一方で区道については、歩道拡幅等の整備に伴い、道路植栽の整備がおこなわれたため増加している。